

特集「Web 技術」の発刊に寄せて

澤 田 啓

Web とは何か。我々は Web と呼ばれるものと既に 20 年付き合ってきた。それは、当初「ハイパーテキスト+インターネット」以上でも以下でもなかった。文字や画像から構成されるテキストを、ネットワークを超えて結合することにより、広く浅く或いは一つの知識を深く掘り下げることに役立った。

しばらくの年月が経過した後、Web で表示される内容をプログラムによって動的に生成できるようになった。それから急激に Web が持つ意味が変わってきた。今ではどうだろうか。Web は生活の基盤になったと言ってよい。天気を調べる、本や服を買う、列車や飛行機を予約する、預金の残高を確認する、行政手続きを行う、ビデオアーカイブを楽しむ。ありとあらゆる場面に Web は入ってきている。最近の調査では、インターネット・プロトコル (IP) を用いた通信やサービス事業は日本全体の GDP (国内総生産) の約 3.7%、約 20 兆円の規模になり、自動車産業など「輸送用機械製造業」を上回る。Web そのものの経済規模ではないにせよ、Web の位置づけは益々拡大していると考えてよいだろう。

ところが昨年のことである。米国 WIRED 誌編集長のクリス・アンダーソン氏は突然「Web は終わった」と発表し米国を中心に議論を巻き起こした。正確には「オープンな Web からクローズドな Web やアプリケーションに移行しつつある」という主旨だ。彼がこれを言い出した理由は三つあると考えられる。一つ目はソーシャル・ネットワークと呼ばれる「人」に焦点をあてたクローズドなアプリケーションが脚光を浴びていること、二つ目はスマートフォンやタブレット機器の台頭、そして三つ目はビデオなどの非テキストデータの増大である。いずれもこれまで Web の世界では主役であったハイパーテキスト、検索エンジンや Web ブラウザーを必須とはしないものだ。

本当に Web は終わったのであろうか？

ある意味ではそれはイエスであり、別の意味ではノーである。狭義の Web = 「Web ブラウザーを主役とする Web」は、インターネット利用全体の拡大そのものから見ると、ブラウザー利用の拡大が緩やかなために、むしろ縮んで見えることもあるかもしれない。しかし Web の定義は元来そのようなものではない。例えば Web の心臓はブラウザーでも HTTP でも HTML でもなく、DNS (ドメイン名システム) と URI/URL であるという解釈がある。そうであるならば、Web は終わるところか拡大し続けている。

しかしここで言いたいことは Web の正確な定義ではない。誤解を恐れずに言えば、そんなものは無意味である。Web は変化している。進化している。そしてそこには「Web 技術」が所在する。

Web はとても柔軟である。この仕組みについて、脆弱性のような負の側面で語られることもあるが、夢を実現できるとみんなが信じるからこそ発展している。そしてそこではありった

けの技術が投入されている。高速なブラウザー、新しい言語環境、新しい高速化技術、新しいデータ処理機構や分析技術、新しい開発フレームワーク。Web 技術の世界は本当にダイナミズムに溢れている。進化の速度はきわめて速く、変化の激しいことのたとえとして使われる「ドッグイヤー」ですら表現としては違和感がある。しかしながら、Web の世界は新しいものばかりではない。古くは金融機関で培われたトランザクション処理の考え方、CPU・メモリや入出力の最適化をベースとしたパフォーマンスの考え方や基本的なユーザビリティなど変わらないものもある。言い換えると Web 技術とはいつの時点も過去から生き残ってきた技術の集大成であると言えるのではないだろうか。

そして冒頭の問いに戻る。Web とは何か。その答えは時代によって変わる。今回の特集号では、2011 年の Web 技術の側面から、日本ユニシスがどのように Web に取り組んできたのか、また今後どのように取り組もうとしているのかをご理解いただく論文集とするものである。

(常務執行役員 兼 USOL ホールディングス株式会社代表取締役社長)